名古屋芸術大学キャリアセンター紀要　第12号　089～101頁（2023）

# 初心者に向けたピアノ指導法
## ～対象者の年齢や目的に相応しい指導の在り方について～

Piano Teaching Methods for beginners
~Suitable teaching approaches considering student's age and their purpose to take course~

戸田　恵　*TODA Megumi*

### I. はじめに

筆者のライフワークの軸は本学教員であるが一方で、音楽教室を主催しピアノ講師として指導を行っている。ピアノ教室には容易に想像ができる通り、多くのピアノ初心者の生徒が在籍し、その年齢は3歳の未就学児から70歳を超えるシニア世代まで非常に幅広い。また本学音楽領域内でも、ピアノ経験がない学生が1単位ピアノ実技授業や保育指導者（以下「保育士」いう）、小学校・中学校・高等学校音楽教諭（以下「音楽教諭」という）養成の授業を履修している場合があり、その指導にもあたっている。

筆者は約10年間のピアノ指導歴があり、様々な生徒や学生と接してきたが、初心者の頃に受けた指導がその後のピアノ技術の上達に多大な影響を及ぼすことを実感している。ピアノを習い始める年齢と比較的需要の多い目的を［表１］に表す。

［表１］

| 年齢 | 目的 |
|---|---|
| 未就学児（幼児） | 教養をつける・専門家を目指す / 趣味の一環 |
| 小学生 | 教養をつける・専門家を目指す / 趣味の一環 |
| 中・高校生 | 保育士・音楽教諭免許取得を目指す / 趣味の一環 |
| 大学生 | 保育士・音楽教諭免許取得を目指す / 趣味の一環 |
| 一般・シニア世代 | 脳の活性化・健康維持 / 趣味の一環 |

本稿では［表１］の中で筆者の経験から需要が多いと考えられる、専門家を目指す目的で始める未就学児を【対象者A】、脳の活性化・健康維持を目的に始めるシニア世代を【対象者B】、保育士・音楽教諭免許取得を目指す大学生を【対象者C】として、相応しい指導の在り方について考察したい。

### Ⅱ. ピアノという楽器について

ピアノという楽器は１つの楽器で旋律（メロディー）、和音（ハーモニー）、リズムを演奏することができる万能な楽器であり、「楽器の王様」と呼ばれることもある。ピアノが有する特性として、確実な音程、広い音域、ハーモニーを奏でることの容易性が挙げられ

る。88鍵の音域はオーケストラの全楽器を超える広さであり、さらには音色や強弱の変化が非常に多彩である。ピアノ協奏曲を２台のピアノで演奏することが出来たり、ヴァイオリンやフルート等旋律楽器の協奏曲を伴奏することが出来たりと、オーケストラの演奏を１台のピアノで表現することが可能であり、全ての楽器を総括し得る中心的な楽器と言える。このことからも独奏楽器としてだけではなく、伴奏楽器としても最適であることが分かる。そのため今日では、保育や初等教育の現場、中学校・高等学校の音楽の授業において、ピアノが用いられていることが非常に多い。

またピアノには大きく分けて二種類あり、グランドピアノやアップライトピアノといったハンマーで弦を叩いて音を出す「アコースティックピアノ」と、そのアコースティックピアノの音を録音しスピーカーから音を出す「電子ピアノ」である。ピアノを始める際に購入する楽器について、その金額や置く場所の住宅事情等、様々な環境に合わせて選ばなければならない。専門家を目指すのであればスタートからアコースティックピアノ、更にはグランドピアノであることが望ましいが、保育士・音楽教諭を目指すためであれば電子ピアノも有効だろう。

## Ⅲ.対象者の年齢や目的に相応しい指導の在り方

筆者が主催するピアノ教室へ通い始める生徒は、ピアノに触れたことのない全くの初心者も多い。その多くは幼児であるが、少なからず成人以上の大人、シニア世代も在籍する。ここでは前述の【対象者Ａ】、【対象者Ｂ】について述べる。

### １.【対象者Ａ】の場合

未就学児・幼児の大きな特徴として物事を「感覚的」に捉える力に長けていることが挙げられる。世界中どの国でも周りの人が話す言葉を無意識に聞き、理解し話し始める。ピアノを習得させる際もその特徴を利用し、ピアノを演奏することが「特別」と感じさせないようにすることが理想的ではないだろうか。言葉での説明は極力少なくし、とにかく知的理解がないままでも行動を優先させ、それを何度も繰り返し「感覚」を掴ませることに重きを置く、実践重視の指導法が適切であると考える。

まず、導入期の「リズムの読譜」についての指導法を例にあげる。筆者は、楽譜上の「リズム」は言葉を話す感覚に近いことから「音」よりも比較的身近に感じやすいと考えているためこれを先に学ばせる。「全音符、２分音符、４分音符、８分音符」（同種類の休符も含む）の４種類を抑えれば、初期に学ぶ楽譜のリズムはある程度網羅できる。この４種類の音符の長さを［表2］のように動物の鳴き声に例えてみる。

［表 2］

| 音符の種類 | 動物 | 鳴き声(4拍分) | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 全音符 | ライオン | ガォ | ー | ー | ー |
| 2分音符 | うし | モ | ー | モ | ー |
| 4分音符 | いぬ | ワン | ワン | ワン | ワン |
| 8分音符 | ねずみ | チュチュ | チュチュ | チュチュ | チュチュ |

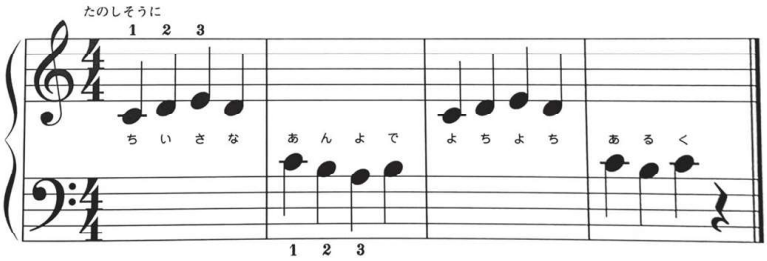
この様に、音符の名前よりも先に音符の模様と動物の鳴き声を一致させ、鳴き声の長さに合わせて手拍子をしながらリズムを覚えさせていく。但しその際に、2分音符、4分音符、8分音符を全音符と同じ長さ分（4拍分）セットにしておくことが重要である。そうすることで、全音符の長さを2等分したものが2分音符、4等分したものが4分音符、8等分したものが8分音符であることを、自然に理解させられる。

少し進度が上がり、組み合わせのリズムを習得させる際も、2拍を4分音符1つと8分音符2つに分けたリズムに「ラーメン」、2拍を8分音符・4分音符・8分音符1つずつに分けたリズムに「ヒコーキ（飛行機）」等、同じリズムで発音する言葉を当てはめ、発音通りのリズムで手拍子をさせ、まず感覚を掴ませた後に言葉での説明を加えると早く理解させられる。

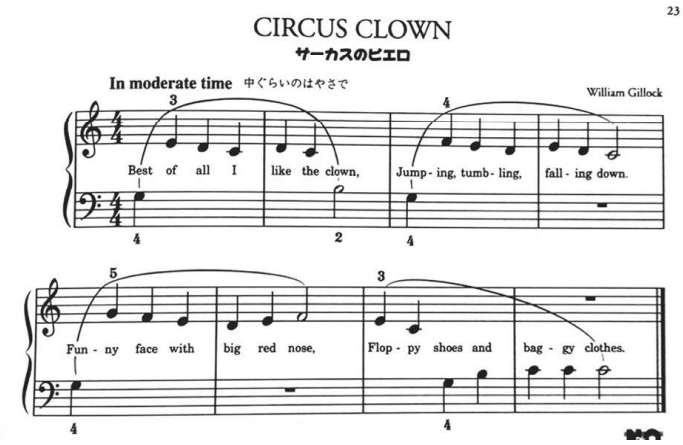
次に導入期の「音の読譜」についての指導法を例に挙げる。幼児の日常生活において、幼稚園や保育園で歌う歌、テレビから流れる音楽、街中で耳にするメロディー等を聞いていることで、音に高低があることの感覚は既に体験している。それを示すものが音を読むことだと理解させるために、いきなりピアノを弾かせるのではなく、まず簡単に実践することができる「歌」を取り入れ、楽譜に書かれている事が音の高低を示すものであるということに繋げる。生徒が既に知っている歌やメロディーを指導者がピアノで弾き歌いをして示し、正しい音程を聞かせた直後に生徒に歌わせる交互唄が効果的だろう。その際に歌わせながら、音の高低に合わせて手を上下させると自然に音程感覚が身に付く。進度が上がれば音程の幅に合わせて手を上下させる幅を調整させる。その後楽譜を見せながら同じ歌を歌わせ、指導者が生徒の歌に合わせて楽譜のどの部分を歌っているかを指し示しながら進めることで、生徒が手の上下で表している音の高低が、楽譜上でどのように表されているか確認させておくことができる。「音が上がる＝五線譜の上に向かう＝鍵盤上では右にいく」「音が下がる＝五線譜の下に向かう＝鍵盤上では左にいく」ということを、漠然とでも頭の中に描けるようになる。これらは未就学児が使うピアノ教材に歌詞のついているも

のが非常に多いことの所以であると考えられる。2つの楽曲を例に挙げる。

［譜例1］オルガンピアノの本1より




［譜例2］はじめてのギロックより




更には階名でも歌わせておくと、ピアノの鍵盤が「ドレミファソラシド」という音階の並びになっていることを理解させやすくなる。この音階を覚えさせる際には、上りの「ドレミファソラシド」と、下りの「ドシラソファミレド」をセットにしておくこと。更にはいつも「ド」から始めるのではなく、「レミファソラシドレ」「レドシラソファミレ」、「ミファソラシドレミ」「ミレドシラソファミ」・・と、すべての音からの音階の上り下りに触れさせておくと、鍵盤の配列を覚えさせることができ、後々の読譜の際に役に立つ。

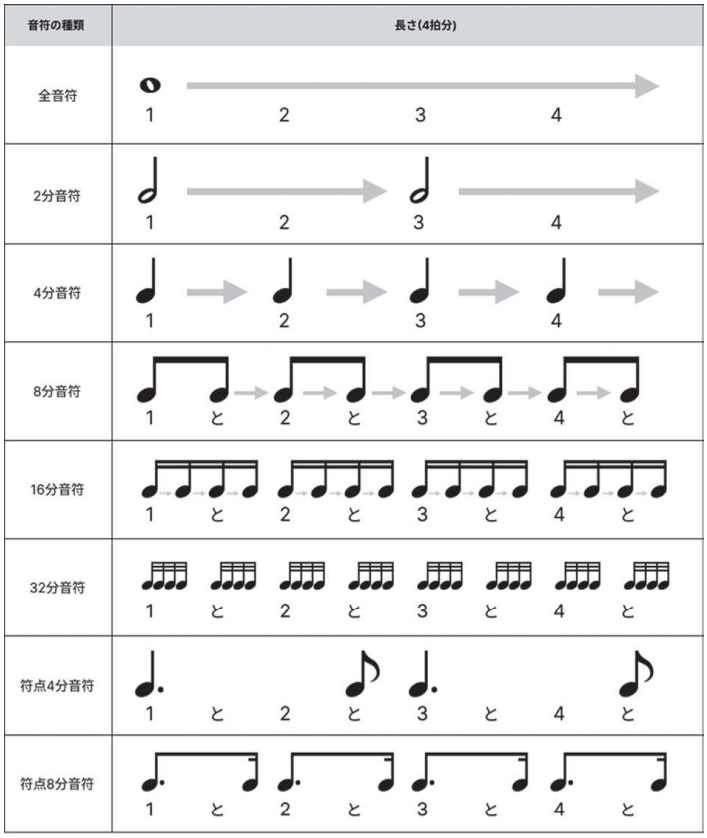
幼児が平仮名を覚え始める様に楽譜を読み、歌を歌う様にピアノを弾く、生活の中での自然な行動の一部としてピアノを奏でることが習慣化されるよう導けると良いと考えられる。

## 2.【対象者B】の場合

筆者は、ピアノ初心者のシニア世代の大半は「ピアノは難しい」という固定概念を持っているように感じている。勿論そうでないわけではないが、理由なくただ漠然と「難しい」と捉えている人も多いのではないだろうか。その固定概念が学びの妨げにならないように、感覚的な実践重視の未就学児への指導法に対し、シニア世代への場合は「理論的」に解説することを中心とした指導法が適切であると考える。

Ⅲ-1で述べた様に、未就学児へは音の読譜よりもリズムの読譜を優先させたが、シニア世代への指導の際にはこの二項目は同時進行させる。リズムに関しては［表2］の様に数学的に詳細を説明する。

［表2］




初心者が演奏できる譜面に複雑な細かい音符のリズムは出てこないことが多いが、先回りをして16分音符、32分音符、付点のリズム等の知識を、実際にこのリズムを使った楽譜を使用するより前の早い段階から解説し、知識として学ばせておくようにする。

また導入教材については、クラシック曲、ポピュラー曲等ジャンルを問わず、まずメロディーに馴染みがある「知っている曲」を選ぶ。それが導入教材として相応しくない多少複雑なリズムや音の配列が出てくる楽曲であったとしても、先に頭の中でメロディーがイメージできることにより、脳からの指令が指に届きやすくなると考えられる。

更に未就学児との大きな相違点として「手指の柔軟性」が挙げられる。ピアノ演奏には10本の指を独立させて動かすことが必要不可欠であるが、幼少期からピアノを弾くという習慣がない状態でピアノの前に座るというだけでも、初期のうちはどうしても不必要な動作や不適切な動作が起き、余計なエネルギーが働き身体や手指も硬直する。指が独立して動きにくい、指が広がりにくい、左右別の動きがスムーズにできない等の問題が出てくる。そのためシニア世代の導入期には、机の上など鍵盤以外の場所、すなわち身体がリラックスできる場所でピアノを弾く動作を準備運動のように行うことも効果的である。初歩

の訓練として、１から５までの数字を１つずつランダムに書き並べた紙を何枚も準備し、その中からくじ引きのように１枚選び、瞬時にその番号と指番号とを結びつけて両手指を動かすといったトレーニングも練習方法の一つである。

実際にピアノを弾き始める前段階の精神的・身体的問題に寄り添った指導を心がけ、ピアノを弾くことを習慣化させられるよう導きたい。それに伴い次第に身体の協応動作がスムーズになり、不要な筋肉の緊張も和らいでいき弾きやすくなっていくと考えられる。

## Ⅳ.【対象者C】への指導内容とこれまでに筆者が指導にあたった学生の例

Ⅱで述べたピアノの特性からもわかるように、皆で歌を歌う、皆で体を動かしながら踊るといったことが教育に組み込まれている幼児・初等教育の現場、また音楽の授業が行われる中学校、高等学校の教育現場ではピアノが使用されている場合がほとんどである。そのため、その教育者免許取得を目指す学生はピアノの技術習得が必須となるが、近年それを目指し本学へ入学する学生に、ピアノ歴が無い場合が増加している。学研教育総合研究所「小学生の学習・学習環境の変遷　習い事」のデータ［表３］からも分かるように、ITの発達に伴ったものか稽古事の多様化が進み、幼少期にピアノを学ぶ子供が以前に比べ減少していることが原因の一つであると推測される。

［表３］

| 順位＼年 | 2001年 | 2002年 | 2003年 | 2004年 | 2005年 | 2006年 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1位 | ピアノ | ピアノ | ピアノ | ピアノ | ピアノ | ピアノ |
| | 42.6 | 44.8 | 47.1 | 45.6 | 41.1 | 47.2 |
| 2位 | 水泳 | 水泳 | その他 | 水泳 | 水泳 | 水泳 |
| | 38.9 | 35.4 | 37.6 | 37.2 | 38.7 | 36.0 |
| 3位 | その他 | その他 | 水泳 | その他 | その他 | 英語・英会話 |
| | 29.1 | 34.9 | 37.3 | 29.1 | 25.5 | 28.4 |
| 4位 | 習字 | 習字 | 英語・英会話 | 英語・英会話 | 学習塾 | 学習塾 |
| | 26.5 | 27.3 | 26.5 | 25.6 | 24.9 | 26.7 |
| 5位 | 英語・英会話 | 英語・英会話 | 習字 | 習字 | 英語・英会話 | その他 |
| | 22.2 | 26.3 | 25.3 | 25.3 | 24.3 | 21.4 |

| 2013年 | 2014年 | 2015年 | 2016年 | 2017年 | 2018年 | 2019年 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 水泳 | 水泳 | 水泳 | 水泳 | 水泳 | 通信教育 | 水泳 |
| 31.5 | 31.0 | 29.0 | 31.1 | 27.0 | 25.8 | 28.4 |
| 英語・英会話 | ピアノ | ピアノ | ピアノ | 学習塾 | 学習塾 | 学習塾 |
| 26.1 | 19.2 | 15.0 | 19.8 | 21.9 | 23.8 | 16.7 |
| ピアノ | 学習塾 | 学習塾 | 英語・英会話 | 音楽教室 | 英語・英会話 | 通信教育 |
| 25.6 | 18.1 | 12.7 | 16.4 | 17.0 | 15.5 | 14.2 |
| 習字 | 英語・英会話 | 書道 | 学習塾 | 英語・英会話 | アプリ、ゲーム | 音楽教室 |
| 17.6 | 14.4 | 12.1 | 14.3 | 16.5 | 3.4 | 14.0 |
| サッカー | 通信教育 | サッカー | 書道 | 通信教育 | オンライン英語 | 英語・英会話 |
| 12.0 | 12.2 | 10.2 | 11.8 | 11.0 | 3.1 | 13.6 |

©学研教育総合研究所（Gakken）

（注１）表中の習い事名の下の数字は回答した児童割合（単位：％）

（注２）調査対象は、2006年までは「１～６年の学習」「１～６年の科学」の読者、2013年以降は人口比率を考慮して日本全国から無作為抽出

（注３）「ピアノ」と「音楽教室」、「習字」と「書道」は同一回答にカテゴライズ。「学習塾」は補習塾と進学塾の双方を含む

今後もこの状況が続くことが予想されるため、初心者やそれに近いピアノ歴で保育士や音楽教諭免許取得を目指す学生への指導法は非常に重要である。音楽教室へ通う生徒達は長い年月を見越して上達を目指すのに対し、免許取得までの期限が決められていることへも充分に配慮する必要がある。Ⅲ-2で述べた「【対象者B】の場合」と共通する部分が多いが、その後学ぶべきことを免許取得のための課題である、歌いながらピアノで伴奏を弾くという「弾き歌い課題」のピアノパートに焦点を当てて考察する。さらに筆者がこれまで

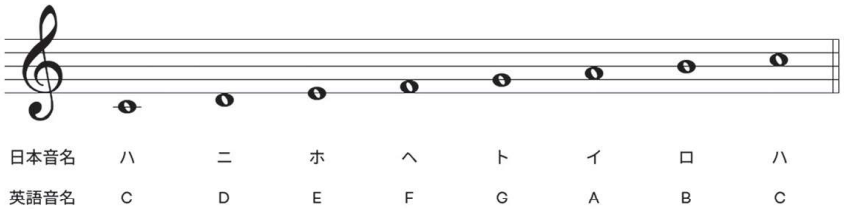
指導にあたった学生の問題点とその解明の具体例を示す。

1.コードネームの理解

「弾き歌い」のピアノパートは「伴奏」に当たる。歌唱に置いて伴奏の役割は看過できないものであり、まずは伴奏とは何かを理解させることが必要であると考える。音楽の三大要素は「メロディー」「リズム」「ハーモニー」であるが、伴奏はその内の「ハーモニー」の役割を担うものであり、楽曲のメロディーを引き立て、より豊かな響きを作り出すためのものである。初心者がピアノで弾き歌いをする場合は、右手でメロディー、左手で伴奏を弾く形が一般的であり、その伴奏には三和音を使用するのが最も容易に演奏できる伴奏型である。この三和音は「コードネーム」と呼ばれる和音の構成音を表す記号で楽譜上に表記される。これが理解できればメロディーにハーモニーをつける（和音をつける）事ができ伴奏することへと繋がっていくため、コードネームについての指導を最優先させることが重要であると考える。

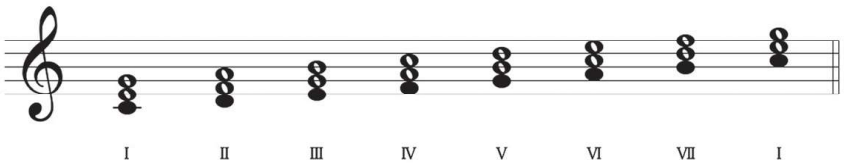
コードネームとはどのようなものか、ハ長調のコードネームを例に挙げてみる。まず始めに［譜例 3］のように日本の音名と英語の音名をハ長調で示す。

［譜例 3］



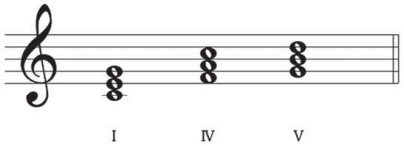

この音階の上に 3 度（2 音間の高さの隔たりを「度」と表す）で積み重ねられてできたものを三和音といい、［譜例 4］のように、順にⅠ（一度）の和音、Ⅱ（二度）の和音・・・と呼ぶ。

［譜例 4］

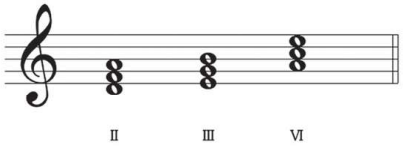



この三和音を全て弾いてみると、その響き方により３つのグループに分けることができる。［譜例 5］をＡグループとし、これは明るい響きの和音の集まりで「長三和音」と呼び、英語ではMajor（メジャー）の和音と言う。［譜例 6］をＢグループとし、これは暗い響きの和音の集まりで「短三和音」と呼び、英語ではMinor（マイナー）と言う。

［譜例 5］




［譜例 6］

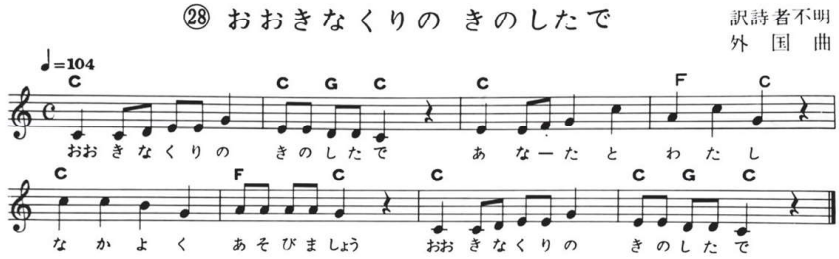



［譜例 4］のⅦの和音は長調の音階では一つのみ、不安定な響きの和音で「減三和音」と呼び、英語ではDiminish（ディミニッシュ Dim.と略す）と言う。この和音は進度が進んだ際に四和音として使用する。

以上を踏まえてコードネームの表記について記す。AグループはMajorの和音で、［譜例 1］の音名と結びつき、Ⅰの和音、ハ音、つまりC（シー）の音の上に積み重ねられた和音を例にとると、「CM（シーメジャー）」となる。表記の際はM（メジャー）は省略され、コードネーム「C（シー）」となる。同様にⅣは「F（エフ）」、Ⅴは「G（ジー）」となる。BグループはMinorの和音で、Ⅱの和音のコードネームは「Dm（ディーマイナー）」、同様にⅢは「Em（イーマイナー）」、Ⅵは「Am（エーマイナー）」となる。

［譜例 7］はこれらのコードネームが実際に譜面上でどのように記されているかの例である。

［譜例 7］




右手でこのメロディーを弾きながら、左手で前述のコードネームの知識に沿って三和音を弾けば、初心者でも容易に伴奏をつけられることがわかる。

［筆者が指導にあたった学生Aの例］ピアノ歴なし、音楽経験なし

まったくの初心者で、義務教育での音楽の授業も苦手意識があったというこの学生は、他の学生と自身との比較から学習意欲をなくしており、精神的なケアが第一に必要であった。「幼少期から学んでいないとピアノの上達は難しい」という思い込みから、ピアノを

特別なものとして認識していたため、まずその意識改革を試みた。国語で新しい漢字を覚える時、数学で新しい公式を習う時と同じ感覚を持ってピアノに向きあえるように努めることで身近な楽器として捉え、努力次第で誰でも弾けるようになることを説明した。最終目標が「弾き歌いができること」であるため、ピアノが片手ずつしか弾けない状態であったとしても、「ピアノの右手パート＋歌」「ピアノの左手パート＋歌」のように、弾くことと歌うことを同時に行う感覚を初期段階から学ばせた。またコードネームを読む知識もなかったため、これを理解することも重要であると説明した。コードネームの理解は［譜例7］のようなメロディーのみの記載にコードネームのみが記されている楽譜でも、自分で左手パート（伴奏パート）を作り出し演奏できるようになることへと繋がり、最も簡単に伴奏が付けられるようになることを実感させた。この能力は、幼児・初等教育の現場や、中学校、高等学校の音楽の授業現場においても非常に役立つものであり、出来るだけ多くの楽曲で体験させた。

2.演奏時の運指

ピアノを練習する際には指に番号を付けて、楽譜上の音をどの指で弾くのが良いかを考えながら音と指番号を結びつけて進めていく。この運指法はピアノ演奏において非常に重要であり、正しい理解が短期間で曲を仕上げることへの鍵となる。長い期間をかけて上達を目指す音楽教室の生徒の場合は、この運指法は様々な曲を学んでいくうちに自然と身についていき、指導者からの指示がなくても自身の経験から適切な運指が付けられるようになっていく。しかしレッスンを受けられる期間に限りがある学生達へは、初心者の段階から運指法の解説を取り入れることが効果的であると考える。将来教育の現場に立つ際に、運指が書かれていない楽譜でも自身で考えることができ、対応できる力をつけさせておく。

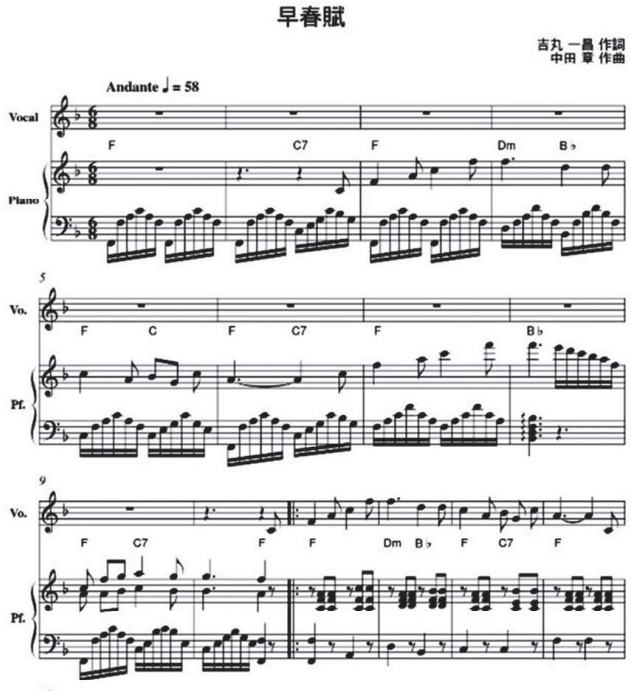
［筆者が指導にあたった学生Ｂの例］ピアノ歴なし、義務教育で学んだ程度の読譜力、歌が得意

この学生の問題点は、読譜力の不足と苦手意識からくる意欲喪失であった。持参された楽譜上の全ての音にカタカナで階名が書かれていたため、その問題点を指摘した。ピアノを弾く行為は、楽譜を見て、その情報を頭で認識し、指へと伝達され成り立つ。楽譜を見るという段階が「読譜力」と言われるところであるが、学生はこれを一つ一つの音の階名を言い当てることであると捉えてしまいがちで、一つずつの音を「ド・レ・ミ・・・」と数え始める。この面倒な作業を少しでも軽減しようと、一音一音にカタカナの階名を書き込んでしまう。これは文章を読む際の漢字に振り仮名が打ってある状態と同じであるが、非常に読みにくくなることは明らかである。カタカナの記入がある楽譜を見ながら弾くことは、楽譜を読みながら弾いていることにはならず、階名のカタカナ以外の情報には全く目がいかなくなるため、楽譜の正しい理解へと繋がらない。この一曲の読譜がゴールでは無

いことを説明し、読譜とはカタカナの階名を読むことではないことを説明した。そして、カタカナの階名を書くことより指使いを自分で考え、それを楽譜上に書き示していくことの重要性を実感させた。視覚から入る指番号の情報が、指の動きと楽譜とを結びつけ、読譜にも繋がることを理解させられるようにした。
ピアノは初心者であったが歌に関して潜在的に音程を正確に取ることができ標準より力を持っていたため、弾き歌いの能力とはピアノと歌のどちらも重要であり、また得意な歌の能力がピアノ演奏に大いに役立つことを説明し、意欲向上を図った。

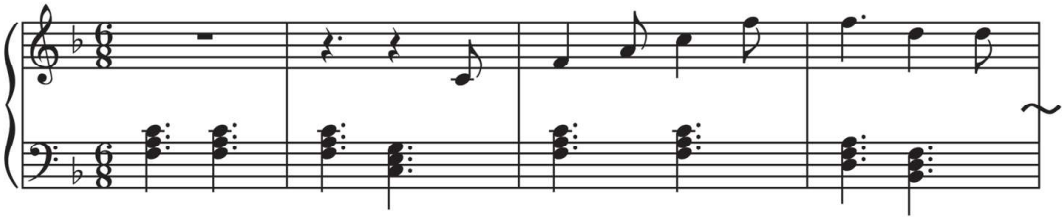
3.楽譜のアレンジ

演奏することの難易度が高い楽譜を容易に演奏できる楽譜にアレンジをするというような「応用力」「即興力」を身につけることが教育の現場では非常に役に立つだろう。行事事での発表の際等は、楽譜通りの完成度の高い演奏が求められることは間違いないが、日々の幼児の歌遊び、毎回の音楽の授業等での演奏は、良い意味での適当な演奏で対応できるであろう。決してピアノ伴奏を軽視して良いわけではないことは前提として、一曲に時間をかけて完璧に仕上げることより、短時間で多くの曲に対応できる能力が必要不可欠であると考える。特に歌の伴奏パートは楽譜通りに１音１音正確に弾かなくても、ハーモニーが適切であれば成り立つことを学ばせることが重要である。そのために、難易度が高い楽譜を自身のピアノの技術で対応できる楽譜にアレンジする事ができるよう指導する。この楽譜のアレンジの際にもⅣ-2で述べたコードネームの知識が基礎となり非常に役に立つ。
［譜例８］「早春賦」という楽曲を例に挙げる。
［譜例８］

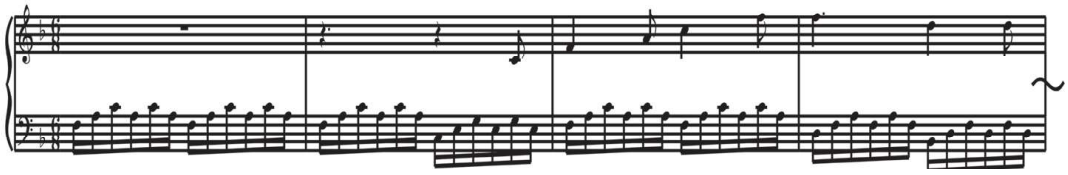


これは「早春賦」という楽曲の冒頭の楽譜であるが、左手の動きが１オクターブ以上の音域を持ち複雑なため、初心者には難易度の高い指の動きが必要である。コードネームの知識があると、この左手の動きはコードの分散であることが分かり、同じコード内の音を音域の狭い簡単な配置に置き換えても曲として成り立つことが理解できる。［譜例 9］、［譜例 10］は冒頭４小節をアレンジしたものであるが、このように左手の複雑な動きを簡素化させられるよう、複数のパターンの伴奏型を学ばせておく。

［譜例 9］



［譜例 10］



［筆者が指導にあたった学生Ｃの例］ピアノ歴５年程度あり、弾き歌い未経験

この学生の問題点は、ピアノは流暢に演奏できるが歌いながら弾くという経験がなかったことである。弾き歌い課題のピアノのパートのみ、歌のパートのみを演奏させるとどちらも問題ないが、それを合わせて演奏することが困難であった。ピアノを演奏する技術は高いため、ピアノパートの難易度の高い楽曲に取り組んでいたが、弾くことと歌うことを同時に行うことを学ぶため、この学生にとってはピアノパートの難易度の低いものを課題に与え、ピアノと歌の両方に意識を持ちながら演奏することを学ばせた。またコードネームを読む知識もなかったためこの知識についても学ばせ、それを使って難しいピアノパートの楽譜を簡単な楽譜にアレンジする力をつけるよう促した。ピアノパートが簡単に弾けるようになる分、歌への意識を持ちやすくし、弾き歌いの訓練をさせた。

4.ペダルの使用について

幼児・大人に関わらずピアノ初心者にとって、右手と左手が別々の動きをしなければならないということだけでも慣れるまでは大変なことであるため、更に足の動きを加えなければならないペダルの使用は、ある程度のレベルに達してから付けさせるのが一般的である。しかし、弾き歌い課題が課せられる保育士、音楽教諭免許取得を目指す学生への指導の際は、早い段階からペダルの機能に慣れさせておくことが良いと考える。

ピアノという楽器は普通に弾いただけでは音の伸びは期待できず、弾いた瞬間から音は

減衰し始め数秒で消えていく。ここで言うペダルは、右側のダンパーペダル（ラウドペダルとも言う）を指すが、このペダルを踏むとダンパー（音をおさえて止める機能）が一度に弦から解放されて戻らなくなるため、弾いた後、鍵盤から指を離しても弦が長い時間振動し共鳴するので、美しい響きを持続することができる。Ⅳ-1でも述べた通り、弾き歌いの伴奏パート、すなわちハーモニーを奏でる役割を担うピアノパートの演奏の際には、和音の響きを持続するためにペダルを使用する技術を習得することは避けられない。またピアノ演奏においてのペダルの技術は、指で鍵盤を下ろすタイミングと、足でペダルを踏むタイミングを図ることが第一段階である。消音機能であるダンパーを戻らなくするためにペダルを踏むため、指で鍵盤を下ろした後にペダルを踏まないとその効果が得られない。言葉で説明すると「弾いた後に踏む」ということになるが、これは頭で理解していても、直ぐにうまく実行できるものではなく、手と足のタイミングを身体に覚えさせ、より自然に演奏に反映させることは容易ではない。そのため、初心者であっても早い段階からペダルを踏むことに慣れさせ、限りある期間を最大に使い習得させなければならない。

［筆者が指導にあたった学生Ｄの例］ピアノ歴８年程度あり、弾き歌い経験あり

この学生はピアノ歴が長く、弾き歌いの経験もあり、コードネームも独学で理解していたため、演奏に関して技術的に全く問題はなかった。しかし、演奏中にピアノパートの音を一つでも間違えると演奏を止めてしまう癖があり、この点に着目して指導を行なった。演奏中、譜面上の一つの音が鳴っている瞬間は１秒にも満たない。演奏とは人がスピーチをしたり朗読したりするのと同じで、流れの中で成り立つものである。話す際に少々言葉に詰まっても、流れがあれば全体として理解ができる。「流れ」とは音楽用語では「フレーズ」と表現するが、演奏の際に少々の音ミスがあっても、止まらずフレーズを繋げて音楽を成り立たせることが重要であることを説明した。それが歌の伴奏であれば尚更であり、少々のミスタッチがあってもフレーズが切れなければ歌のパートには影響がでないことを体験させた。

また演奏の技術を更に向上させるため、専門的なピアノ演奏に関しても触れた。ペダルの使用にも経験があったが、その踏み方に問題があった。「ペダルを踏むこと＝前に弾いた音が伸びて残ること」であるため、正しく使わないと余計な音が残りハーモニーが濁ることになる。自分が弾いている音を聞きながらペダルを踏むことが重要であり、そのための音の聞き方、すなわち「耳の訓練」をするよう促した。更には弾き歌い課題には当然「歌」があり、歌詞が存在する。これは楽曲の雰囲気を掴む重要なヒントになるものである。この歌詞を読み込み理解することで、弾き歌いの際の伴奏パートの表現力について考えることができる。伴奏する際のピアノの音色が楽曲全体の重要な役割であることを理解させ、それ次第で格段に歌いやすくなったり逆に歌いにくくなったりすることを、実際に筆者が模範演奏しながら学生に歌わせることで実感させた。

## Ⅴ.終わりに

本稿では初心者へのピアノ指導の在り方について、その対象者の年齢や目的に着目して筆者の考えを述べたものである。専門家を目指す目的で始める未就学児を【対象者A】、脳の活性化・健康維持を目的に始めるシニア世代を【対象者B】、保育士・音楽教諭免許取得を目指す大学生を【対象者C】と、3つに分類し、比較を含めながらそれぞれの問題点と改善策を提案した。

また、筆者が所属する本学ピアノコースに在籍する学生は、卒業後ピアノ指導者として社会に出る者が少なくないことから、他大学に先駆けて指導法のカリキュラムを設置することは卒業後の自立支援や他大学との差別化につながると共に、学生の多様な進路開拓に役立つと考えている。指導法は、それぞれの学生がこれまで培ってきたピアノ演奏の技術に加え、また別の知識や経験も必要であると身を持って実感しているため、その点についても提案したい。

## 参考文献

1) 小林一夫「ピアノ 初歩の初歩」日東書院（2006）
2) 大野桂「こどもの心理とピアノの指導法」音楽之友社（1977）
3) 古屋晋一「ピアニストの脳を科学する」春秋社（2012）
4) 鈴木渉「ひとりでマスター ピアノ伴奏法入門」子ども未来社（2011）
5) 佐土原知子「新 やさしいピアノ伴奏法１入門編」ドレミ楽譜出版社（2001）
6) 佐土原知子「新 やさしいピアノ伴奏法２応用編」ドレミ楽譜出版社（2001）
7) 高橋正夫「新版 みんなのオルガン・ピアノの本１」（株）ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス（2015）
8) Gillock「ビギナーのためのピアノ小品集　はじめてのギロック」（株）全音楽譜出版社（1997）
9) 小林美実「こどものうた200」チャイルド本社（2018）
10) 学研教育総合研究所「小学生の学習・日常生活の30年を振り返る」https://www.gakken.co.jp/kyouikusouken/whitepaper/30history/chapter1/03.html